

<麦類の栽培ポイント>

1 湿害対策

気象庁の3か月予報（2023年1月24日発表）によると、3月は、気温が平年並～高く、降水量は少ないとの予報が出ています。茎立期以降の湿害は、収量や品質の低下を招きます。大雨が降ることもありますので、明渠の設置・溝さらいなどの排水対策をしっかりと行いましょう。

2 麦踏み

茎立期直前の麦踏みは、穂揃いを良くし、成熟ムラのない倒伏に強い麦にする効果があります。平年の茎立期は3月上～中旬です（昨年は3月上旬頃）。圃場の様子をよく確認した上で、茎立期まで積極的に麦踏みを行いましょう。10～14日の間隔を空ければ次の麦踏みが行えます。

3 雑草防除

雑草は収穫作業の支障になるだけでなく、種子が収穫物に混入すると品質低下の原因にもなります。雑草が発生している圃場では、茎立期までに防除を実施しましょう。雑草の生育が進んでいると、除草剤の効果が劣る場合があります。適切な時期に使用できるよう、圃場をよく観察しましょう。

【防除農薬の例】

令和5年2月6日現在登録状況

農薬名	適用雑草名	作物名	使用時期	使用方法	使用回数
ハーモニー75DF	一年生広葉雑草 スズメノテッポウ	小麦	節間伸長前まで（広葉雑草は、穂ばらみ期まで（但し、収穫45日前まで））（スズメノテッポウは、5葉期までが散布適期）	全面散布 雑草茎葉散布 又は	1回
		大麦	節間伸長前まで （スズメノテッポウは、5葉期までが散布適期）		
エコパートフロアブル	一年生広葉雑草	小麦	節間伸長開始期まで（広葉雑草2～4葉期、ヤエムグラ2～6節期）但し、収穫45日前まで		2回以内
		大麦	節間伸長開始期まで（広葉雑草2～4葉期）但し、収穫45日前まで		
バサグラン液剤	一年生雑草 （イネ科を除く）	小麦	生育期 但し収穫45日前まで		1回
		大麦	生育期 但し収穫90日前まで		

※農薬はラベルの表示を確認して正しく使用してください。

4 赤かび病防除

赤かび病が発生すると出荷できなくなるので、必ず薬剤散布を行いましょう。

【防除農薬の例】

令和5年2月6日現在登録状況

農薬名	小麦		二条大麦（ビューファイバーを含む）	
	使用時期	使用回数	使用時期	使用回数
シルバキュアフロアブル	収穫7日前まで	2回以内	収穫14日前まで	2回以内
チルト乳剤 25	収穫3日前まで （無人航空機は収穫7日前まで）	3回以内	収穫21日前まで	1回
トップジンM水和剤	収穫14日前まで	3回以内 （出穂期以降2回以内）	収穫30日前まで	3回以内 （出穂期以降1回以内）
トリフミン水和剤	収穫14日前まで	3回以内	収穫14日前まで	3回以内

※農薬はラベルの表示を確認して正しく使用してください。

【赤かび病防除農薬の散布時期の例】

二条大麦 （ニューサチホゴールデン、もち絹香）	防除適期：穂揃い期7～10日後（薬穀抽出期） ポイント：登熟期間中に雨が多い場合は、1回目の7～10日後に2回目の散布をしましょう。
はだか麦 （ビューファイバー）	防除適期：1回目・開花始め（おおむね出穂7日後）、2回目・1回目の10日後 ポイント：登熟期間中に雨が多い場合は、3回目の散布を行いましょう。
小麦	防除適期：1回目・開花始め（おおむね出穂7日後）、2回目・1回目の20日後 ポイント：登熟期間中に雨が多い場合は、3回目の散布を行いましょう。

「麦類無人ヘリ防除」・「麦類赤かび病防除薬剤」の取りまとめが行われますので、ご利用よろしくお願ひ致します。

（裏面あり）

<水稻病害虫防除のポイント>

1 いもち病について

いもち病は稲が出穂するまでの期間、菌が葉に感染して病斑を形成し、出穂期以降も穂首や籾などに感染します。感染すると収量・品質に大きな被害をもたらします。曇天・少日照・やや低い気温（25℃くらい）・高湿度などの条件で感染し易くなります。

感染リスクを最小限にするために箱施用剤を有効に活用しましょう。

【防除農薬の例】

令和5年2月6日現在登録状況

	農薬名	分類	希釈倍率、散布量	使用時期	使用回数
箱施用剤	防人箱粒剤	殺虫殺菌	育苗箱 (30×60×3cm、 使用土壌約5リットル) 1箱当たり50g	播種時(覆土前)～移植当日	1回
	ルーチンアドスピノ箱粒剤			播種時(覆土前)～移植当日、又は播種前	1回
	フジワンプリンス粒剤			緑化期*～移植当日 (*:出芽後1～4日くらい)	1回
	トリプルキック箱粒剤			移植3日前～移植当日	1回

※農薬はラベルの表示を確認して正しく使用してください。

※防人箱粒剤、ルーチンアドスピノ箱粒剤、フジワンプリンス粒剤は、ウンカ類にも登録があります。

2 イネ縞葉枯病について

縞葉枯病は、体内に病原ウイルスを持ったヒメトビウンカなどが稲の茎から吸汁をした時に感染します。発病株は生育不良となり、葉は細く巻いたまま垂れ下がり枯れてしまいます（ゆうれい症状）。そして、穂の出すくみ、不稔が発生し、大きな減収につながることもあります。

防除には、抵抗性品種（とちぎの星、あさひの夢、にじのきらめき）の作付けが有効です。縞葉枯病は発病後の治療はできません。罹病性品種（コシヒカリ）を作付けする場合は、防除効果のある箱施用剤の使用と本田防除の実施をしましょう。

【防除農薬の例】

令和5年2月6日現在登録状況

	農薬名	分類	希釈倍率、散布量	使用時期	使用回数
箱施用剤	フェルテラチェス箱粒剤	殺虫	育苗箱 (30×60×3cm、 使用土壌約5リットル) 1箱当たり50g	播種時(覆土前)～移植当日	1回
本田	トレボン粒剤		2～3kg/10a	収穫21日前まで	3回以内
	トレボン乳剤		1000～2000倍、60～150L/10a 300～600倍、25L/10a	収穫14日前まで	3回以内

※農薬はラベルの表示を確認して正しく使用してください。